

てはかゝる徴證は見當らないやうに思ふ。現存史料の示す所では、回鶻では牟羽可汗の時代（759—779）に唐から睿息以下四人の摩尼教僧侶を伴つて歸つたのを、その國に於る同教傳來の初として、以後漠北時代を通じて盛にその信仰が上下に行はれ、其の僧侶は常に國政に與り、唐との交渉の事にも従ひ、遂には當時回鶻の唐に對して有した勢力の下に、唐にも幾多の摩尼寺を建立して、其の教を宣傳するに至つたものである。従つて佛教がまた其の間に流行したものと考へられないし、勿論また記録の之を證するものも存しない。かゝる熱心なる摩尼教徒であつた回鶻人が一度其の地を去つて高昌の地に移るに及んで、直に舊來の信仰を棄て、佛教を奉ずるに至つたものと考へられず。其の後も摩尼教徒として存在したであらうと思はれるが、從來屢々學者によつて引用せられた記録は、實に此の事を證明する屈強の材料である。その最も確なる一例を挙げると、西紀九百八十八年頃にバグダッドで書かれたアブルファラージュのフィーリスト（Aboul-Faradj, Fihrist）の中に^⑧「第十世紀の初に五百人の摩尼教徒がサマルカンドに集り、其の宗義を公然宣傳したので（サマン朝の）、ホラツサン侯は之を殺さうとした。此の報を聞いて Chine の王——Tagazgaz の君主の事と考へるが——はホラツサン侯に使を送り、自分の國には汝の國に居る^⑨摩尼教徒よりも遙に多數の回教徒が居る。若し吾が同宗徒の一人でも汝が殺したならば、自分はすべて國內の回教徒を殺し、其の寺院を破壊するだらうといはせた。そこでホラツサン侯は摩尼教徒の生命を赦し、たゞ人頭税を課するに止めねばならなかつた」と見えて居る。此の記事は十世紀の初、即ち唐末五代の初頃には、Taghazgaz 即ち高昌の回鶻は尙固く摩尼教を信仰してゐた事を證明するに足るものである。されば回鶻は高昌に移ってから後三・四十年、少くとも唐の時代を終る頃迄は佛教を信じたものでは無かつたと言ひ得やう。勿論自分はかゝる記